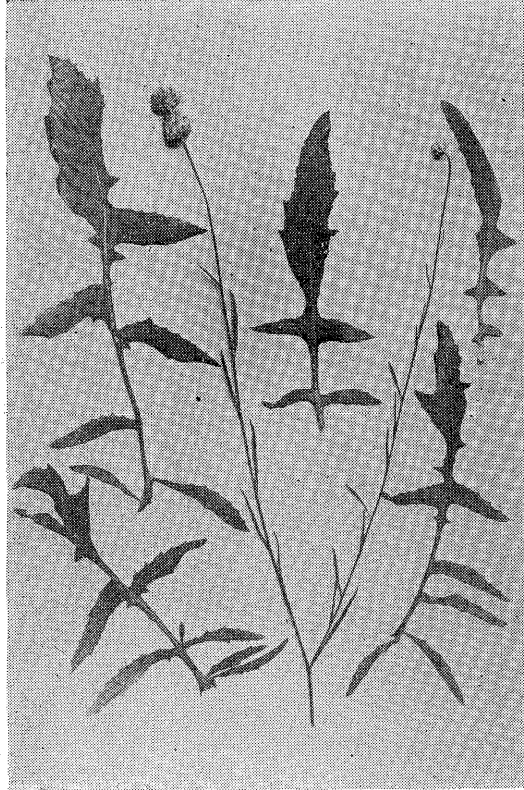


○外来植物3種 (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: Three adventive plants.

キダチキツネアザミ 神奈川県藤沢市の浅井康宏氏は昭和 28 年に同市鶴沼で採集した *Centaurea* sp. にキダチキツネアザミなる和名を与えて同氏編集の藤沢近傍帰化植物報告で公表したが、爾来学名のせん考はそのままになっていた。筆者は当時標本を

与えられたるも、これをたしかめる機会がなかつたが、たまたま、本年千葉県津田沼町にある東邦大学の構内にもこれが一株発生したので、ついに意を決してこの難物の名称を解決しなければならなくなつたので手近な文献により解決を試みることにした結果、これは欧亜のオリブ自生地域を原産地域とする *Microlophus salmantiaca* DC. であることがわかつた。即ち現在の *Centaurea salmantiaca* L. で種名の epithet はスペインの地名である。この草は普通に見られる英米の本で見られないから以下その形相を略記して、同好の参考に供したいと思う。私は Reichenbach の *Icones Fl. Germ.* 10, t. 750 (1874) によつたが、また A. Clouque の *Flore de*



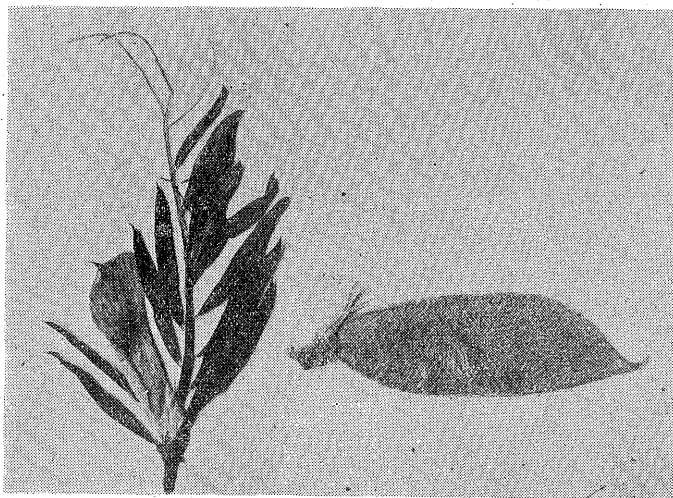
Centaurea salmantiaca. キダチキツネアザミ

France (1894) にもよつた。前者には全形及び部分の図があり後者には頭状花一個が図説してあり、普通見られる本で図のあるのはこれ位なものかと思われる。

さて、この植物は2年生の草本で全株やや灰緑色で剛直、茎の表面には数条の繊維束が線状に隆起し多細胞性の乳頭状毛及びその残存基部が散生するも枝端の近くでは殆んど無毛になる。高さ約 80 cm、根際より発する枝は水平状に展開し後に上部の枝と同様

に斜上し、更にくり返し分枝し、分枝の末端には1個の頭状花をつける。根生葉は全形楕円状、両面に乳頭状毛あり、辺縁は2-5深裂し、裂片は互生しやや下向、犬牙状で両半不同、頭片は大形で長楕円状、莖葉は狭線状で長さ1-6cm不整歯牙縁で順次線形になる。頭状花序は卵形で広径約1cm、総苞鱗片は楕円状卵形、先端は鋭尖で暗色花盤には長さ7mm白色の剛毛密生。花は全部管状で周辺及び中心花共長さ子房共約2cm5裂、裂片は淡紅色狭細。柱頭は更に色濃し、冠毛は白色剛毛状で長さ2mm花盤の毛よりも短かい。瘦果はやや歪んだ扁平柱状で長径の方向に縦線があり線間帯にしばしば細紋を見る、無毛、長さ2mm、暗色。

オニカラスノエンドウ (浅井氏) 浅井氏が鶴沼(17, V 1954)でとられた *Vicia* である。羽状複葉の小葉片は蔓化したものを除いて約10対、各片線状楕円形長さ1.5-2cm幅1.5-2mm先端針状、両面に長毛あり。花は葉腋に1-2花、長さ約2cm。萼



Vicia lutea L. オニカラスノエンドウ

齒の長さは不等で齒に毛がある。花弁は中部以上は青紫色、以下はやや淡黄、莢は幅ひろく長さ3.5cm幅1.2cm、表面多毛で5種子を容る。本品は *Vicia lutea* L. の一形で花片が青紫色を帯びる品種

である。歐洲の雑草で恐らく歐洲の一部の原産であろう。英名は Yellow vetch で J. Sowerby の English Botany 7, t. 481 (1798) に正確な着色図がある。花色に変異性のある種だから、それにより一々名称を与える必要はない。

オオハンゴンソウ このアメリカ産園芸植物は、東京では夏の園草としてよく見られたが、いつのまにか姿が見えなくなつて人から忘れられてヤエ咲のものがはびこつている。ところが一昨年秋田へ行つたら駅の構内近くにさかんにさいていた。更に一昨年日光へ行つたら、菖蒲浜の養魚場では帰化状態になり、戦場原入口近くでは正に原に侵入を企てている、そうしてこれらは曾て見たものより花色がうすくなつてきている。